浄土 第62巻 2号(毎月1回1日発行)平成8年2月1日発行 昭和10年5月20日第3種郵便物認可

浄土

1996 2 February

法然上人鑽仰会・発行

日本テレコム

咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。
　ちょっと切ない、なつかしい。
いろんな話をしたり、聞いたり。
　そんな何気ないことが、人と人との
　　固い絆の第一歩。
それぞれの人の、それぞれのお話に
　花を咲かせるお手伝い。
安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。

フリーコール 0088-82（無料）

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00〜23:00（年中無休）

台湾の寺院を巡る

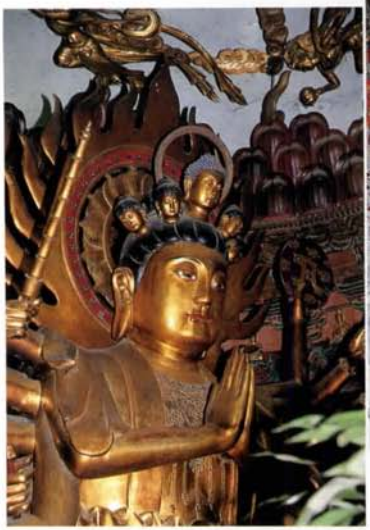
—その二—

台湾でもっとも信徒数が多いのが仏教で約500万人、続いて道教の約330万人とされている。道教は中国で起こった宗教だが、中国文化の精神を強く含んでいるため日本の統治時代には迫害を受け、信者は仏教寺院の中に密かに道教の神を祭っていた。戦後、宗教の観念が寛大になり、仏教と道教が合流して、１つの寺廟の中に違った神仏が祭られるようになり、台湾特有の形になった。寺廟はいつも多くの人々で賑わい、雨の日でも焼香の絶えることがない。

写真撮影⊙長谷川 章

関渡宮

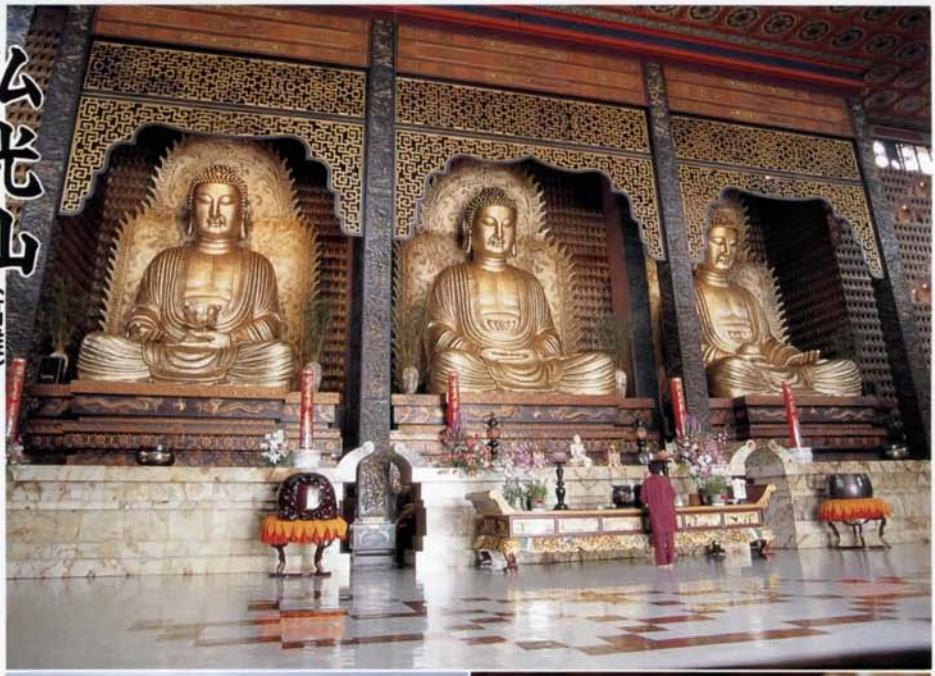
▼天官の像。手に天官賜福を持つ。



関渡宮

龍虎塔（高雄）

仏光山（高雄）



祥福寺（花連）

▲▶地蔵菩薩の像。

浄土

1996/2月号　目　次

カラーグラビア ……写真＝長谷川 章　3
法然上人の心を探る ……藤堂恭俊台下　8
インタビューご縁にみちびかれて ……中村 元　14
法然上人のみ教えをいただいて ……藤本行弘　24
魅せられて映画に ……丸林久信　32
表紙は語る　野草・花ごよみ……石井敏之　41
外国で生活して……生野善應　42
橋の端で考える……きりぶち 輝　48
蕎麦屋のある町……藤木芳清　54
コラム ……63・64
Ｊフォーラム ……65
事務局便り ……69
編集後記 ……70

表紙題字＝浄土門主　中村康隆猊下
表紙撮影＝石井敏之
アートディレクション＝近藤十四郎

巻頭連載

因果応報を解く

――法然上人の心を探る（5）――

大本山増上寺法主
藤堂恭俊台下

わが増上寺では毎朝の勤行のあと、導師を勤めた私が法話をすることになっている。私は去年の十月から、法然上人のご自作の和歌を、三ヶ月にわたって連続的にお話をした。

法然上人（一一三三―一二一二）と言えば『選択本願念仏集』や『一枚起請文』の撰者であることを、誰しも周知している。年代的に上人のあとに続く親鸞聖人（一一七三―一二六二）や日蓮聖人（一二二二―一二八二）は著述を多く遺されているが、それに比して上人は大変少ない。上人は訪ねきたる人たちと膝をまじえながら法門を語り、問いに答える対話の達人であり、決して著作の人ではない。その数少ない著述のすべては要請に応えて綴られたものばかりで、上人が自発的に綴られたのは和歌だけである。

上人ご自詠の和歌は、上人諸伝中の圧巻、四十八巻からなる絵詞形式からなる『法然上人行状絵図』巻第三十の第六段に

上人やまとうたを事とし給はざりけれども　我国の風俗にしたがひて　法門によせては　ときぐおもひをのべられるにや。あるひは門弟のなかにしるしをけるを申つたへ　あるひはてづからかきつけ給へるを没後に披露

しける。

と前置きして、十七首を連載している。

また『黒谷上人語燈録』巻第十四の巻末に一首、巻第十五に九首を連載している。この両者を比較すると重複する和歌があるから、正味上人のご自詠は十九首となる。そのなか

「冬」を題する一首

ゆきのうちにほとけのみなをとなふれば
つもれるつみぞやかてきえぬる

という御詠をとりあげたい。

無始よりこのかた現在にいたるまで、私が身と口と意をとおして行った行いは、すべて罪であると甘受するならば、積もりにつもった罪の質量に唖然とせざるを得ない。積雪にたとえられるみずからの罪に気づかせて下さるのも、その罪を消滅して下さるのも、共に南無阿弥陀仏ととなえる一声一声をとおして触れる 阿弥陀仏の光明によってである。

人は今、過去を背負い、未来を孕みながら現在を生きているという。今現に

生きている私は、今までに私が身と口と意をとおして行った行いの総決算として在り、また、今私が行っている行いの一つ一つが、未来の私を決定づけているのである。まさに自業自縛である。この因果律によって私がこれからさき毎日の日送りをとおして、罪は雪だるまをころがすと次第次第に大きくふくらむように、積みかさねられるばかりで、罪の解消は望めない。

仏教は、世人が因果律にもとづいて物事を判断するのに対して、因をして果にいたらしめる縁を重視して因縁を説く。だからこそ積もった罪は、阿弥陀仏の光明という縁に触れることによって消滅するわけである。私たち浄土教徒は、阿弥陀仏の大願業力を増上縁とし、称名念仏を因と受けとめ、この因と縁とが和合することによって往生できるのである。したがって、みずからがとなえた称名の数量の多少、つまり自分の力によって自分の罪を消滅させる、というのでは毛頭ない。

雪は太陽の日ざしを受ければ、おのずから解けてゆく。しかし再び雪降れば、雪はまた積もる。そうだとすれば、阿弥陀仏の光明によって、積もりにつもっ

た私の罪が文字どおり消滅したとしても、また新たに罪をつくるようでは、何にも芽出たくも、有難くもないと私は思う。

浄土三部経という浄土宗がよりどころとする経典のなか、とくに『観無量寿経』故には、「仏名を称するが故に五十億の生死の罪を除く。(中略)汝、仏名を称するが故に諸罪消滅せり」(下品上生説)と説き、また「仏名を称するが故に念念の中に八十億劫の生死の罪を除く」(下品下生説)と説いている。この「除く」と、「消滅」という表現をいかに理解すべきであろうか。過去に完了した既成の罪をすべて「除き」「消滅」させるのか、今よりさきに犯しつくるであろう罪をつくれなくするのかについて、考えてみたい。

宗祖上人のご指南を『正如房へつかはす御文』の上に求めると

観無量寿経にとかれて候は　生まれてよりこのかた念仏一遍も申さず。それならぬ善根もつや〳〵なくて　あさゆうものころし　ぬすみし。かくのごときのもろ〳〵のつみをのみつくりて、とし目をゆけども　一念の懺悔の心もなくて　あかしくらしたるものゝ　をはりの時に善知識のすゝむるにあひて　たゞ一声南無阿弥陀仏と申したるによりて　五十億劫があひだ　生死に

めぐるべき罪を滅して　化仏菩薩三尊の来迎にあづかりて仏の名をとなふるがゆへに罪滅せり。（『黒谷上人語燈録』巻第十四所収）

と、宗祖上人は述べられている。

この書状は、正如房すなわち後白河法皇の第三皇女式子内親王（一一五三？―一二〇一）が臨終を迎えて、法然上人に善知識を勤めて欲しいと願った書状に対する本目こまやかな長文の返書の一節である。

この上人のご文は『観無量寿経』下品上生の経説をふまえて綴られている。上人は罪の消滅を前向きに捉えて、これからさき「五十億劫があひだ」という長いながい年月にわたって、「生死にめぐるべき罪を滅す」というのであるから、既成の罪はその人の未来を決定づけることができなくなるわけである。つまり念仏の一声ごとに称名する人が、罪をつくれなくするのが念仏である。まさに因果応報・輪廻から解放・解脱は、南無阿弥陀仏とみ名を呼び、おとなえする一声一声の上に加わる阿弥陀仏の大願業力によってこそ実現するのである。

『浄土』新年号 新春特別インタビュー

ご縁にみちびかれて

中村 元氏に聞く……②

新年号につづいて中村氏のお話。前号では中村氏の生い立ちや、氏がインド哲学を選び学んだわけ、また、経典などの翻訳について伺ったが、今回は、日本の宗教について、また、日本人の信仰についてなどをお聞きした。先生は自宅のご仏壇に阿弥陀さま、勢至丸さまをお祀りし、日々拝んでいるとか。さて、どんなお話が出てくるか。

縁なき衆生は度しがたし？

――　先生は、仏教を研究されていて、自ら出家したいと思ったことはありませんでしたか。

中村　ありませんでしたね。それからまた、私が仮に出家というか、どれか一つの宗派に入ることについては、周囲の反対が強かったのではないかと思います。また、日本人の中には宗派を嫌う意識もあるんじゃないかと思いますね。

――　それはそうでしょうね。先生がどこか一つの宗派を選ばれたら、それに影響される人がおおぜい出てくるでしょうからね。ところで今、宗派ということが出て来ましたが、これからの日本仏教はどのように進んでいくと思いますか。

中村　私はね、これからの日本仏教の中の宗派はだんだんとなくなっていくんじゃないかと思っています。そしてまた、そのほうがいいんじゃないかと。

世間では現にその方向で進んでいるんじゃないですか。一般の人々は宗派などあまり気にしていないと思いますよ。自分の菩提寺が何宗かも知らない人が多いですし、お寺で読んでいるお経が宗派で違うなんて思っている人もほとんどいないでしょう。それに宗派意識が外に出てくると、その宗派間で必然的に争いも多くなるでしょ。人々はそういうことを嫌がりますよ。

時間はかかるでしょうが、宗派はなくなる方向に進んでいくと思いますね。

――　やはり、そういう方向に進んでいくんでしょうかね。たしかに、私たち僧侶から見ても、自分の家の宗派を知っている人は少なくなっていますし、また、宗教への関心も時代とともに薄くなってきています。残念ですがこれは私たち僧侶の責任でもありますね。

ところでお釈迦さまの教えには、俗に八万四千の法門と言われるように、人々の資質に応じた教えがあると言われますよね。まあ、宗教もそうした教えの中から出てきたわけですが、もし、自分にあった教えを探そうと思ったら、やはり自ら経典などを勉強しなければなりませんかね。

中村　ええ、結局ご自分であたってみられることが必要となりましょうね。

――　よく「縁なき衆生は度しがたし」と言いますが、やはり縁がなければ、自分で自覚をしてこなければ、仏教は遠い存在になってしまうのでしょうか。

中村　そう思いますね。やはり因縁が熟さないと芽をださないんじゃないですかね。求めるものがあって、はじめて答えるものが出てくるんじゃないでしょうか。求めるものが何もなかったら、どんなにいろいろな答えを用意していてもなんにもなりません。

日本では、浄土宗の方はやはり法然上人を

中村元氏に聞く…②

受けておられるんで、お念仏の教えが身についておられると思いますね。法然上人を思わせるような、非常にあたたかな、春風駘蕩たる性格の方が多いですね。こういうものは、仏教的なものとして人々の心を誘うんじゃないですか。

しかし、これも人々の性格によりますわね。性格の強い人だったら、あるいは日蓮聖人のような生き方の方がうったえるのかもしれませんしね。

ご縁を無駄にしちゃいけない

――　先生は何年か前からご自宅に仏壇を設け、阿弥陀さまをおまつりしてお参りしていると聞いたことがあるのですが。

中村　ええ、でもあまりこだわってはいないんですよ。昔からわが家の宗旨の浄土真宗の阿弥陀立像を奉じていますが、今はちょっとしたご縁があって長野の善光寺さんの阿弥陀さ

まをも拝んでいます。それからこれと並んで、これもちょっとしたご縁でいただいたものですが、浄土宗の法然上人の幼いころの勢至丸さまのお像も。あれもなかなかいいですね。これもちゃんとお仏壇に納めて拝んでいますよ。

――そういう、お参りをするようになられたきっかけはあるんですか。

中村 それはやはり、ご縁があったからでしょうね。くださったり、分け与えられたりすると、このご縁を無駄にしちゃいけないと思って……。

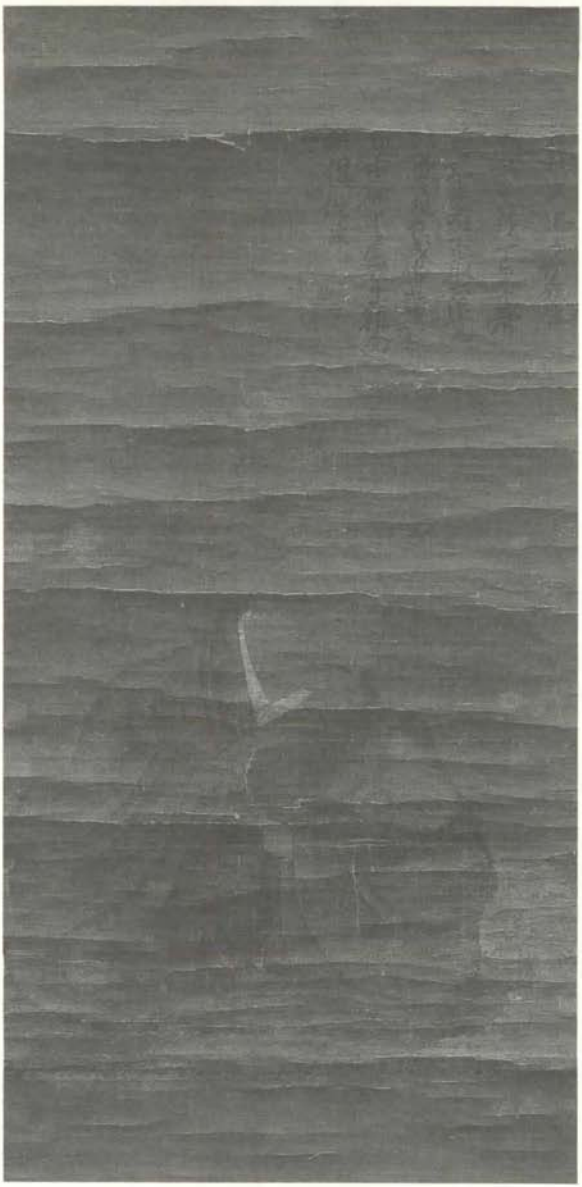
不思議な力に従う

――やはり、宗教というか信仰などは、大いなるもの、目にみえない力のようなものを感じて、そして自分を高めていくのだと思いますが、宗教は人間にとって本当に必要でしょうか。

中村 必要だと思う方には必要ですし、必要じゃないと思う方には必要じゃない、というしかないんじゃないでしょうか。先程もお話に出ましたが、「縁なき衆生は……」ということだと思います。毎日が楽しく、困ったり悩んだりすることがない人には、お釈迦さまの教えもなかなか耳目には入らないでしょうし、反対に悩み苦しみのある人には心うつ言葉も多いでしょう。やはり縁だと思います。求めようとするご縁があってはじめて必要になるのじゃないでしょうか。

私はね、我々は目に見えないもの、大きな不可思議な力によって導かれていると思っています。これを〝因縁〟と言ってもいいでしょう。この宇宙のあらゆるものが原因、条件となってこの世を作っていて、それぞれのものを支配している。私なら私を支配している。どんなにがんばってみても、この力――因縁から逃れようはないんです。老いや病、そして死もさけられません。

では、どうするか……。仏教には〝自然法



（高松　法然寺　法然上人絵像）

爾〟という語があります。私は最後のところでは偉大なものにこの身をお任せするとでも言いましょうか、私たちの思考を超えた不可思議な力に従って自然に生きるしかないと思っています。言ってみれば、あらゆる出来事を素直に有り難くいただく境地ですね。

といって、何もしないでいいということではありませんよ。むしろ、だからこそ、この与えられた人生を、まわりの人々にあたたかい気持ちで接し、生き物を慈しんでいきたいと思っています。

仏教のあたたかいものを伝えたい

―― そうですね。その不可思議な力を感じることができると宗教心も起きてくるんでしょうね。

先生の訳本や著作を読んでいますと、仏教の教えをやさしく、分かりやすく著していると思います。特に縁起などは大変分かりやすいのですが、一方、無常というか、そこから波及するニヒリズムに向かうような考え方は取られていないように感じるのですが。

中村 ええ、取りませんね。私はね、たとえば、法然上人のお絵像を拝見していましても、ニヒリズムみたいなところは全然ありませんよね。あたたかなものを感じますよね。やはり、それが仏教じゃないですか。あるいは、少なくとも仏教のうちで私たちがいただきたいと思うものだろうと思いますね。讃岐の法然寺さんにある法然上人絵像もいいですね。ああいうのを、何かの折りに掲げて拝むだけでも感化を与えるでしょうね。それはやはり、法然上人がああいう円満な方だったから、人々に感化を与えられたんじゃないでしょうかね。

だから、浄土宗でいえば、浄土宗のお寺さんがそれぞれの地方で法然上人の風格を伝え

てくださっているということはありがたいことだと思いますね。

私は、こうしたことはやはり、学問の問題というよりめいめいの心の問題だと思いますね。難しい仏教の議論は学者さんに任せて、私たちは仏教のあたたかいものを伝えていくことが大切だと思いますよ。そして、ここでお坊さんたちは、無理に布教ということを考えないで、その風格というものがおのずと人に伝わっていくように考えてみたらいいんじゃないでしょうか。

――鎌倉時代は、日本の宗教にとって大変革のときだったと思います。そしてそれぞれの宗祖、法然上人とか日蓮聖人とか道元禅師などは大変に勉強をなさった方たちですが、それぞれどうして一様に、法然上人、親鸞聖人は南無阿弥陀仏だけでいい、日蓮聖人は南無妙法蓮華経だけでいい、道元禅師はただ坐るだけでいい、というように、ただ一つのものだけでいいというようになったのでしょうか。

中村元氏に聞く…②

中村　それは私の専門ではありませんが、あの時代はやはり変動期でしたからね。古いものが壊れて新しいものが出ようとする。そして、人々が新しいものを選んだわけですね。で、その中で残ったものが今ある何々宗と呼ばれるものですね。しかし、それだけでいいかどうか。大事なものを逸しているとも考えられます。たとえば叡尊さんとか忍性律師などがなさったことは、どうかすると今の仏教に欠けているおそれがあります。これは西洋の宗教にも欠けているものですよ。

だから、今の方が、昔からのもののうち、何を受けて、何をいただいて、何を発展させられるかということは将来の課題になると思います。

――その選択というものを私たちが今していかなければならない、ということですね。

中村　そういうことになりましょうね。しか

し、それには地域的なちがいもあると思います。たとえば、関西の方はあまり変化の必要を感じられないと思います。

――それはどうしてですか。

中村　お寺が尊重され、大事にされていますでしょ。新しいことをする必要がないんです。しかし、東京あたりをごらんなさい。もう、古い伝統は全部壊されてしまって、仏教があるんだかないんだか分からなくなってしまっているでしょ。そうすると、おのずから選ばなければいけなくなる。そうすると新しいものが出てきます。どちらが良くてどちらが悪いということはありませんが、ただそれで、人間にまといつく因縁によってどれかを選んで発展させるようになるでしょうね。

浄土宗でしたら、戦後増上寺の法主であった椎尾弁匡博士が「共生（ともいき）」ということをおっしゃっていましたが、この共生がいまごろになって世間でもてはやされていますね。この考え方は京都の雰囲気からは出てこないんじゃないですか。そんなことは、わざわざ言わなくてもいいんです。ところが、関東にいる椎尾先生にしてみれば、これは大変だということなんですね。当時の浄土宗でこれが受け入れられたかどうかはしりませんが、やはり関東では何かをしていかなければならない必要性があったんですね。

――今の若い僧侶は、ほぼ全国的に今の仏教界がこのままでいいとは思っていないと思います。しかし、いいとは思っていないけれど、ではどうすればいいか、ということがなかなか見つからない。そしてまた信仰のあり方も、オウムなど新興の宗教を見ても分かるように、家の宗教から個人の信仰に変わってきていますね。

中村　そうですね。西洋などは多くは個人の宗教ですよね。そして日本の社会も西洋化が日々進んでいますから、それに応じた対策を考えなければいけないんじゃないでしょうか。

――その西洋化で考えますと、今の日本

人は、若いときには西洋のものをどんどん受入れ、行動などでも実行していきますが、ある程度の年齢になると日本人であったことを意識するというか、「自分とはなんなのだろう」と内省をして、アイデンティティーを求めだす。そして、今の日本を見て分からなくなる。日本人とはいったいどういう者なのでしょうか。

中村　私は、日本人とはどのようなものであるか、というようなアイデンティティーは忘れちゃっていいんじゃないかと思います。ただ、どの国の人が見ても「いいなぁ」と心ひかれるようなものがあれば、それがやがて日本的なものとして尊重されて発展するんじゃないんですか。最初から「日本人とはこうあるべきものである」ということを大前提みたいに掲げる必要はないと思います。そしてまた、今はこの面での変革期でしょうね。

中村元氏に聞く…②

東洋と西洋では宗教の考え方が違う

――　そこに仏教のあたたかさが出てくればいいんでしょうが、近年の日本、いや、日本の西洋化が進めば進むほど、何か争いが増えているように思うのですが……。

中村　それは事実ですね。西洋の社会というのは個人の我を主張する社会ですからね。そして法律を重んじるでしょ。それに対して日本は法律より和を重んじる。人と人の和で問題を解決してしまう。この違いがありますから、西洋的な考え方が入れば入るほど争いは増えるでしょうね。

私は、世界はやがて一つの社会になると思っています。そしてそうなると、この「和」を重んじる日本的な特徴を考慮せざるを得なくなるのではないかと思っています。

――　しかし、現在はまだ、一つになるどころか分裂への争いがつづいています。そ

してまた、その争いにもイスラム教やキリスト教が関わっています。まあ、この二つの宗教は昔からよく争っていますが、こうした争いを先生はどう見ていますか。

中村　戦争をしたという点においては良くないと思いますね。それにひきかえ仏教は宗教戦争がなかったからいい教えだと思いますよ。この争うということは西洋的な宗教の本質的なものでしょうね。

しかし、東洋人の考える宗教は違います。宗と教を区別するんです。「宗」というのは、もとのもので言葉でいえないもの。それを自分はこうだ、と受け取って人々に説くところが「教」になるわけです。だから「教」は人によって違うけれども、「宗」というものは、言葉に言い表せないものということになる。これが東洋人の理解だと思います。

だから、宗教が違うと言って争ったりするのは宗教の本質を失するものであることになるんです。

――　そうですか。それはいいことをお聞きしました。しかし、今の日本で宗教というとやはり西洋的な考え方の宗教になっているようにも思うのですが。

中村　それは、日本の宗教学者が西洋の学者がたてた宗教の定義とか理論にもとずいて議論しているからだと思いますが、これはやはり十全のものではないと思います。日本の学者はもっと努力すべきですね。西洋の理論で日本の宗教を語るのはやはり間違っていると思いますね。

――　そうですね。そしてそれは今の日本の文化全体にもいえると思いますね。

やはり、私たちは先程先生が言われたように仏教のあたたかさを伝えるとともに、また、日本にこれまであったものを見直す必要があるということですね。

どうもありがとうございました。

法然上人のみ教えをいただいて

藤本行弘

特別寄稿

法然上人のみ教えは「いつでも、どこでもお念仏を申しなさい。南無阿弥陀仏と申すことで救われるのですよ。」ということですが、これは一見やさしいようで実はなかなか難しいことだと思います。皆様はいかがでしょうか。実は、私はお念仏が唱えられなくてだいぶ苦労を致しました。

私がそれまでのサラリーマン生活に終止符を打って、僧侶の道を歩み始めて十四年になります。生まれ育った東京を離れて、遠く広島県は宮島にやって来たのは昭和五十七年の春三月でありました。

慣れない土地、初めての僧侶生活、苦労もありましたが、何と言っても一番苦しかったことは、「南無阿弥陀仏」と心から申せないことでした。

浄土宗の坊さんならばだれでも念仏は申す、イヤ申さなければなりません。それは分かっているのですが、法然上人のみ教えのとおりに、自らが愚かな者、至らない者であることを自覚して、「仏助けたまえ」と念仏を申すことがなかなかできませんでした。

いろいろな疑問が心のなかで渦巻きました。阿弥陀様は本当においでになるのだろうかとか、極楽に往生することがそれほど有り難いことなのだろうかとか、念仏を申して何になるのだろうかとか、さまざまです。

それでも念仏を申し、更に仏教書を読んだり、説教を聴いたり、内観道場といって自分の心を見つめる所で一週間こもったり、さまざまな努力をいたします。それでもなかなか心からお念仏が申せませんでしたが、ある一人の尼僧さんとの確執がわたしを変えていったのです。

※　※　※

宮島には変わった習慣があって、葬式の時には島の僧侶七人全員が呼ばれます。浄土宗、浄土真宗、真言宗、禅宗など、その家の宗派

が何であろうと全てのお寺さんが集まって菩提寺の宗派のお経を読むのです。

七人の僧侶の中に、私より二十歳ほど年上の尼僧さんがいらっしゃいます。この方が割合厳しくて、(当人はそういうつもりはないのでしょうが) 僧侶になったばかりの私に姑の嫁いびりのようなことをされました。

よほど相性が悪いのか、箸の上げさげから歩き方に至るまでうるさくおっしゃいます。さらに又、仏教でもそれぞれの宗派によって考え方も修行方法も違うのですから、そこはお互いに自主性を尊重しなければなりませんが、この方はそうではありませんでした。

ある時にこんなことがありました。

「光明院さん」

「はい」

「あんたのところのお経に、一枚起請文というのがあるじゃろ」

「はい」

「ありゃ、わしゃ気にくわん。読みなさんな」

びっくりしましたね。一枚起請文といえば、法然上人のご遺言状、浄土宗の教えの根本が簡潔に書いてあり、毎日お読みする大切なお文です。これをよその宗派の人が読めとか読むなとかとやかく言うことではありません。

「どうしてでしょうか?」

「あの中に、尼入道の無智の輩に同じうして、というところがある。あれはワシをばかにしておる。私は愚かなものではないぞ。」

「ああそれですか、その尼入道というのは、尼さん、貴方のことではありません。尼入道で一つの言葉なのです。在家の人で髪の毛を落としたり又は有髪のままで仏道修行をした女性のことを尼入道と言うのですよ。あなたのようにきちんと出家をなさった方とは違いますよ」

「そんな言い訳は信じないぞ。それに無智の輩に同じうしてなどと、自分のことを愚かな

ものだなどというのはおかしいではないか。人間は修行をして、智恵を磨くのではないか。初めから愚かなどと言うのはおかしい。」

「そこが、貴方のようにもともと自分は仏なのだと考えるところと、自分は凡夫であると考える浄土宗の違いなのです。

私たちは、凡夫の自覚をもって仏様に救っていただく宗派なのです。」

「ともかくわしゃ気にくわん、あれは読みなさんな」

随分と乱暴な話です。よその宗派のお方が指図することではありません。今でこそ笑って話せますが、そのときは腹の中が煮えくり返る思いが致しました。

一事が万事こんな調子ですから、又あの人に会うのかと思うとお葬式に行くのがいやでいやでたまりません。会えば心臓がどきどきして、お経の声も震えてしまいます。

私はそれまで他人に死んでほしいと思ったことはないのですが、このときばかりは、「この人早く死なないかなあ」と、心の中で思ったものです。

※　※　※

ところがそんなふうにして、二年三年と経ったある日、街でその尼さんが楽しそうに近所の人と話しているところを見たのです。

その時に突然「アッ」と気が付いたのですね。「この人にも親しく話す人がいるじゃあないか。この人にも良いところがあるんだ。」

当たり前ですが、その人にも良いところがあるからこそ親しく話す人があるのです。

ですから私も、嫌ってばかりいないで、彼女の良いところを見て行けば、嫌な思いをしないですむ筈。自分の色眼鏡で見て、勝手に相手を悪い奴だと思ってしまう、それが苦しみの原因だと気が付いたのです。

「よし、こだわりのない眼で、今度からあの人の良いところを見るようにしよう。」

そう思いまして、次からはできるだけ嫌わないように、こちらから話しかけるようにと、心掛けました。

……しかしそうは思ってもいざ顔を見ると言葉が出ないのですよ。努力して、

「今日は、良い天気ですね」

「ああ」

と言われると後が続きません。情けないものです。

「最近お体はいかがですか」

「別に、たいして変わりませんよ」

もともと話したくないのですから、会話になりません。

こうして又二年三年と歳月が流れました。

「こだわりのない気持ちで、接してゆこう」

と思うのですが、どうしてもこの人の顔を見ると素直になれないのです。心が穏やかでなくなります。皆様の中にも同じような経験をされたことがありませんか？　嫁姑、上司と部下、気の合わない隣家の人、いやなお客。本当に困りますね。

※　※　※

ところが、そのうちに、だんだんこだわりのない気持ちになれない自分が情けなくなって来ました。

始めは、「あいつが悪い」と相手のことを見ていた。

次に、「相手にも良いところがあるのだから、自分も色眼鏡をかけないで、こだわりなく見て行こう」と相手ばかりでなく自分にも目を向けるようになりました。

そしてついには、「どうしてもこだわりの捨てられない自分が情けなく」なって参りました。もう相手のことはどうでもよくて、この自分が気になり出したのです。

何と自分は素直になれないのだろうか、情けないことだ。実に自分は好き嫌いの激しい人間だ。こんなに努力をしてもどうしてもこ

だわりを捨てられない人間だ、このように思うようになりました。もう尼僧さんはどうでもよいのです。見つめる相手は自分になって来ました。

それまで人間は努力をすれば何とかなると思っておりましたが、どのように努力をしてもどうにもならないものが私の心の中にある、と気が付いたのです。どうしようもないのが実はこの私である、と思うようになりました。

こうして、よくよく自分を見つめて見ると、私は自分中心であり、欲が深く、すぐ腹が立つ、高慢な人間であります。あの尼さん厭な人だなあと思ったその厭な所が自分にもあるではないですか。

「我が心　鏡に映して見るならば
さぞや姿の醜かるらん」

だからといってどうにかなるか？　こだわりなく、おおらかな心になれるか。イヤイヤそう簡単にはなれません。一年や二年いや一生修行をしたところで私の心の中に居座っている煩悩は出て行きそうにありません。このままで出て行かなければ…、恐ろしいことです。今まではこんなものが私の心の中にあるとは思わず呑気でしたが、いざ気がついてみると…恐ろしいことです。

その時に、「あーこうした私の性格は生まれてから育てたものではなく、きっと何回も何回も生まれ変わって育てあげたものに違いないなあ」と、仏教の教える前の世、この世、次の世という輪廻の教えと、迷いの繰り返しの生活から抜け出られない私がうなずけたのであります。（今考えてみると、自分の姿に気がついたのも、阿弥陀様の光に照らされたからなのでしょう…。）

※　※　※

法然上人様は比叡山で二十五年間血のにじむような修行をなされました。こだわりのない心、清らかな心、腹の立たない心、欲深く

ない心、自分中心でない心、お陰様を喜べる心、こうした心になろうと必死のご修行をされました。

しかしどうしても思いどおりになりません。そしてついに、どうにもならない人間がどうにもならないままに阿弥陀様に救われて行く道、選択本願念仏のみ教え、念仏往生の道を開かれたのであります。誠に尊い有り難いことです。

この私は尼僧さんが縁となって、生まれては死に生まれては死にを繰り返し、迷いの生活から抜け出られない自分に気がつきました。これはいかん、これは困る、これはどうにかして助けてもらわなければならないと切実に思ったのです。その時に初めて「南無阿弥陀仏」のお念仏が心から出てきました。

こんな私だからこそお念仏を杖に、確かなる阿弥陀様に導いていただかなければ、これから先の人生どうなるかわかりません。

更にこのような性質・根性を持ったまま生まれ変わったのでは、再び苦しみを重ねることは間違いありません。どうしてもお浄土に往生させていただかなければ困るのです。浄土に生まれ輪廻の絆をここで打ち切っていただかないと困る、そのように思いますと、「こんな私だからこそ、如来様どうかお助けください」と、お念仏が自然と口から出てまいります。

※　※　※

今の日本は豊かで便利で楽しいことに満ちているように見えます。皆今を楽しむことに一生懸命です。しかし私はお釈迦様が「生老病死」でお示しになられたように、生きることの底には、哀しくて、寂しくて、苦しいものが流れていると思うのです。皆様はいかがでしょうか。

そしてその苦しみの原因は、私たちが煩悩あふれる凡夫であり、更に宿業に縛られて自

分自身が思うようにならない者だからであります。それを救うのは阿弥陀様のご本願のほかにはありません。何故ならば、凡夫は凡夫の力で凡夫から抜け出ることができないからです。

人は、往生だなどと先のことをいってどうなるものかとおっしゃいます。しかし往生をするのは先のことですが、そのことを信じて喜ぶことのできるのは今なのです。だから今が嬉しい。

この度、人として生まれ、阿弥陀様のご本願に会うことができ、信じる心をおこして念仏申し、輪廻の里を離れて、浄土に往生させていただくことができることは、喜びの中の喜びであり、これぞ人間に生まれた目的と申せましょう。

この往生浄土の道、決定往生の道をつたなく歩む私をどうぞ守りたまえ、導きたまえ、助けたまえ、このように誠の心を持って念仏を申し生きて行く、これぞ法然様が示された、私たち凡夫の生きる道だといただいております。

南無阿弥陀仏　合掌

（広島県・宮島　光明院住職）

機縁

連載

魅せられて映画に〈私流映画講座Ⅳ〉

丸林久信

生きるも死ぬも

狙ったものは撃ち落せ！

映画を撮る……当然、撮る目的があるのです。かんたんに言えば、撮りたいから撮り、撮ったから見せたいのであり、見せたいから撮るのです。見せたいということの裏がわには、なんのためにといった意味あいがこめられているのではないでしょうか。

ひとがものを創るということは、そこに必ず動機となるなにかの目的がある筈です。目的なしに創るという作業は行われません。

なにか、それは目的に沿った作者の主張、考え方、目標、哲学といった主題、テーマなのだと思います。

主題のない作品はありえないのです。

私たちの歩き方には、大なり小なり、必ずその在りよう、生きざまというものがある筈です。人間が他の動物と異なるのは、ひとそれぞれが自分の為すべきことについて考え、行動する目的を持っていることだと思います。

自分の行き方、人生について、なんらの目的をも持たないひと、そんな人間は豆腐の角で頭をぶつけて、早くこの世からオサラバしたほうがいい、そう、ほんと、冗談でなしに私はそう思います。

テーマ？　そんな面倒なことを考えずに、自分の思うように撮ればいい。要するに面白ければいいのさ。ぶっつけ本番に、自分の感興がわいたままに撮ればいいのだ。こうしたことを言うひとも多いし、事実、そうした仕事をしていると称したプロもいて、しかもそれが個性的な映画、映像を創っているのだと思いこんでもいるようですが、しからば果して本音は？

よくよく話あってみると、そんなひとにしても、行き当りばったり、その場その場の風次第という訳ではなく、オレは、私は、こんなものを撮るのだと目算をたてていたからこそ被写体に向きあえたのだし、撮ることに集中出来たのだということが判りました。

狙ったものは撃ち落せ！

およそ、どんな表現活動にも、テーマはいらないなどということはありません。

撮る、物を書く、絵を描く、対象を捉える私たちの眼が確かであればあるほど、テーマは底の深いものになって、訴える力が強くなるのです。

さて、私たちが映画をつくるとき、監督、スタッフ、俳優、一丸となって、その作品のテーマを活かすため精一杯の力を出しあい、競いあうのです。

狙ったものを撃ち落せ！　そんな気概で、獲物を追う猟師の眼のように、被写体を追う人間の眼、カメラの眼は、貪欲に、執ように、妥協を許すことなく、情に溺れることなく、テーマを追い求めます。

だが、好事多魔、現場に行ってみると思いがけない出来事や妨害に出会ったり、また、目を奪うように美しい風物とか、好奇心でこころを揺り動かすようなものを発見したりすることがあります。面倒くさいから撮るのをよそうとか、このカットをいれてみたいと思うこともあります。生身の人間、ぐらぐらっとこころ千千に乱れ、迷うことがあります。そんなとき、テーマそっちのけになってしまいそう。

あるときのセット撮影。まえまえから大好きだった女優さんの後ろ姿のF・Sの芝居から、振り返ってカメラ前に近寄ってB・Sになりセリフを言う段取り（演技の順序、やりかたをきめること）だったが、なんとなく照明（ライティング）やカメラポジションが気にいりません。と、カメラマンの玉井さんが、私にファインダー（カメラの横についているのぞき窓）をのぞいてみろと言ったのです。

「どう、丸さん？」

私はファインダーに眼をつけたまま声を弾ませ、うなずきました。

「オーケイ、オーケイ！　これでいこう」

だが、玉井さん、返事がありません。やがて彼はぼそっとした声で、

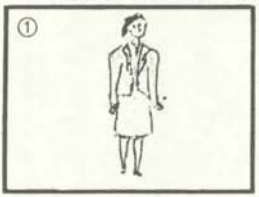
「ちがうんじゃないの、ほんとは……」

「えっ!?」私はガツンと脳天をぶっ叩かれたような気がした。この場面では、こんなに見事なまでの美しい画像ではいけないのだ。女性に惚れると痘痕も靨、あぶなくテーマから外れるところだったのである。私は玉井さんに一本とられました。

教訓「情に溺れるな」でした。

ライティング(照明効果)ポジション(位置)アングル(角度)サイズ(寸法)構図のとりかたなどによっては、テーマに即した人物像が、ころっと変ってしまうことがあるのです。

カメラのサイズ，ポジション（人物と物体）



①フルサイズ（全身）
人物の全身がすっぽり入るサイズ。このサイズあたりからピントもよくあってきます。**F・S**

②ミディアム・サイズ（七分身）
このサイズは多少不安定で，単独よりは2人以上の対話，相手の人物も一緒に入れた方がぶなんです。
M・S

③バスト・サイズ（半身）
人物の半身が入るサイズで，ピントも一番よくあい見た目にも抵抗なく，多用されるサイズです。
B・S(B・T)

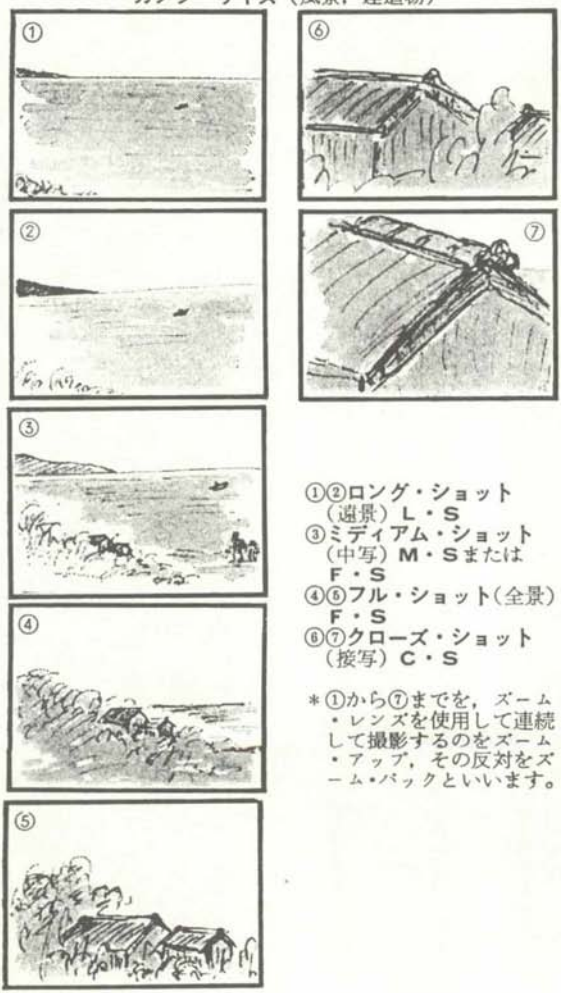
④アップ・カット（大写し）
8ミリはアップで勝負するといわれます。画面がしまり，迫力がますカットです。**U・C(C・U)**

⑤クローズ・アップ（大写し）
通常，④をC・Uといいますが，特に強調したいときは，一部を極端に大写しします。**C・U**

また、キャスティング（配役）によっても、その適否によっては作品の出来映えが違ってしまいます。ミスキャスト（配役の誤り）を承知で、成功する場合もありますが、まず大失敗が多いのです。

人間関係は複雑です。会社やスポンサーからの要求、スタッフからの推薦など、いわゆる顔を立ててやっての配役、また、監督自身が、この俳優でちょっと冒険をしてみたいといった一種の賭けというか、誘惑に負けたような心理が働くことがあります。悪魔の囁きについ乗ってしまうのです。

カメラ・サイズ（風景，建造物）



①②ロング・ショット（遠景）L・S
③ミディアム・ショット（中写）M・Sまたは F・S
④⑤フル・ショット（全景）F・S
⑥⑦クローズ・ショット（接写）C・S

＊①から⑦までを，ズーム・レンズを使用して連続して撮影するのをズーム・アップ，その反対をズーム・バックといいます。

あ、ミスキャストだと気づいたとき、万事休すとみるか、発想の転換を試みるか、そのあたりは微妙なものがあります。いちど決めた配役を降りて貰う、うっかりすればあとあとまで凝りを残しかねません。そこで、案ずるよりは産むが易し、よくしたもので、テレビの連続ものなどで使う術ですが、主役や準主役の俳優の場合など、その役の登場人物が事故で不慮の死をとげたり、外国に転勤、出張のドラマに書き変えられてしまいます。時代劇なら呆気なくバッサリ殺られる始末と相成ります。

と、こう書いてくると、監督は生殺与奪勝手たるべし、いかにも気楽な商売にみえますが、さにあらず。どんな理由があるにせよ、自分で決めたキャスティングですから、考えに考えた挙句の果に、身を切る思いで踏ん切りをつけるのです。いったん、こうと決めたからには、その決断が間違ってはいなかったという結果を出さなければなりません。作品の価値をより以上のものにする確信と自信を持つことが、決断の条件なのだと思います。

ある作品のとき、俳優の動き、撮影条件、自分自身の演出方法、すべてがいまいち、どうにもならず、二進も三進も行かなくなりました。(ええい、どうにでもなれ!)あぶなく投げだしそうになったとき、私は思いがけなく、辻参謀(ビルマ方面軍の作戦参謀。神様参謀といわれた辻政信大佐)の声を聞いた。ような気がしたのです。

昭和二十年一月上旬、私たち捜索第五十三聯隊はイラワジ会戦に投入され、マンダレーに向ったが、途中、敵の遊撃隊と遭遇、討伐戦のためラシオに駐屯。ラシオはマンダレーを起点とした鉄道ラシオ線の終着駅で、ここから先は、私たちが退ってきた中国雲南の山岳を越え、重慶に通ずる塡緬公路になるのです。山峡の渓谷を渡す橋の地点は、四囲の連山すべてが敵に制圧されていて、街道の点と線だけが辛うじて日本軍の支配下にあったのです。

昼間、山の稜線上を往来する敵兵が散見出来たのも妙に無気味なものがあった。橋は爆撃の目標となっていたので、朝になると工兵が橋板を外し、日が暮れると橋板を元のように並べるのです。橋板を敷き終えるのを待って、前線と後方の連絡に当る自動車やトラックが動き始め、待機していた徒歩の兵隊たちの移動が始まるのです。ときどき両側の山腹から敵の砲撃を受けるが、敵にしても、日本軍敗走のあとあとを考えて、この道路を壊す意図はないから、ほんの威嚇程度である。勿論、友軍の自動車はすべて無灯火行進です。私たち分哨は夜の検問所の役割りをつとめるのです。と、不意に煌煌とライトをつけた乗用車が来た。誰何して停車させると、同乗の人物は参謀肩章をつけていたのです。

「俺は辻参謀だ！」

「参謀殿であっても、ここではライトを消していただきます」

「俺にそんな口の利き方をしたのは貴官が始めてだぞ」

怒ると思ったのに、参謀は微笑いながら

「いいか、この街道でライトをつけて走っているのは俺だけだ。山の上でみている敵さんはだな、辻はまだ生きている。あいつは何を考えてるか判らんから手を出すな、そう思ってる。だから貴官もこうして生きてられるんだぞ、わ・は・はは」破顔一笑してのけたのです。

「なあ、伍長よ、貴官は俺を粋がった奴だと軽蔑しとろうが、どうじゃ」

そう言われても返事のしようがない私。

「俺は前線の連中を無事に退らせたいのだ。俺にはその責任がある。だからこんなひと芝居をうってるんだ。考えに考えた挙句の苦肉の策。いや、最後っ屁かな。俺がこうして走っていると敵さんは考える。辻が大手を振って走っている以上、前線は健全だ。うっかり手を出せんぞってな。俺はそう思ってる。信念という奴かも知れん。だが、やりそこなえ

ばドカンだ。生きるも死ぬも自分で決めたことだ。気障に言えば決断したんだ。貴官もそうだ。生きるも死ぬも貴官自身の身の処し方にかかってるんだぞ。(声をひそめて)本当言えばオレは怖いんだがな、ははははは」

何十萬、いや、幾百萬の将兵の生命を左右する参謀の生命を張っての決断。それに較べれば、私の悩みなどケシ粒みたいなものだ。

作品が生きるも死ぬも、私の身の処し方次第なのだ。私は自分の信ずる道を選んだのだった。

(文筆家・元東宝映画監督)

—参考文献—拙著「映画製作ハンドブック」黎明書房
—写真提供—東宝株式会社

レールの移動撮影を急拠きりかえて自動車からのアングルに。右から二番目が筆者。

野草花ごよみ
2月
・
ジャノヒゲ
(ユリ科)

冬になると、花は少ないので、実などを観察することが多くなる。真夏に花を咲かせ、冬にインク色の実を熟させる。山の林床にはえる。日本庭園によく植えられるが、その場合の名はリュウノヒゲと言われる。

撮影場所　東京都高尾山

もうひと花

フクジュソウ(キンポウゲ科)

福寿草。日当りのよい土手等にはえる。東京近辺では2月上旬に咲き始めるが、鉢植えのものは温室で調整して、正月に咲くようにしているそうである。花を咲かせたまま、あわただしく葉を茂らせ、実を結び、木の葉が茂るころには地上部は姿を消す。いわゆる春植物である。学名の意味はアムールのアドニス。

撮影場所　福島県西会津町

表紙Photo／Report
石井敏之

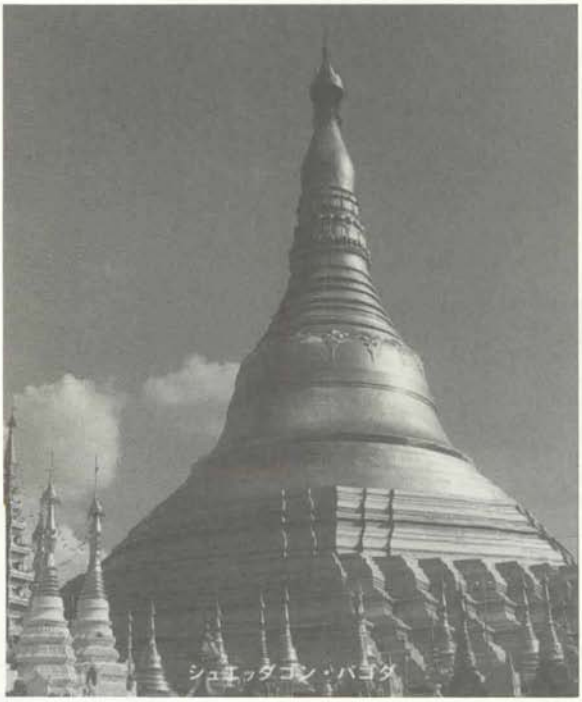
連載

外国で生活して⑦

仏教徒の生活態度『五戒』

ビルマ僧院の体験をもとに

亜細亜大学講師
芝学園教諭
東京光福寺住職
生野善應



シュエダゴン・パゴダ

「生き物を殺してはならない」という戒律がある〈不殺生戒〉。言葉通りに取れば、我々は食事をしてはならない。いや、歩くこと、呼吸することもできない。誤ってアリを踏み殺したり、大気中の微生物や胞子を吸い込んで彼らの命を奪うからである。どうしたらいいのか。また、在家と出家の戒律には区別があるものの、現実にはその意味がなくなっている日本仏教を見るとき、仏教徒の守るべき基本規定はなにか。この二点の解答を求めて、わたくしはビルマ（ミャンマー）の僧院でポンジー（出家）生活を送ったことがある。その時の体験を通じて学び取った戒律の考えについて述べたいと思う。

戒と律

いかなる宗教であれ、信じる人が守らなければならないきまりがある。それを仏教では戒律という。しかし戒と律とでは本質的に著しく違っている。

戒とは、仏教徒が生活の基礎に据えるべき精神的構えであって、出家であれ、一般仏教徒の在家であれ、心に形成しなければならない生活枠である。戒は自律的規制であって罰則がない。いっぽう、律は出家が僧院で集団生活を営むために設けられた規定であって、他律的強制的規則の性格をもち、罰則がある。

戒は、僧俗ともに守るべきものであるが、自律的であるので、当事者がよほどしっかりと、ポイントをつかんでおかなければならない。わたくしは経典に記載された語義からの戒の解釈にはどうしても満足できなかった。体験を重ねながら、わたくしは仏教徒の生活規範としての戒の真意を、次のように汲み取ってきたのである。

戒の本質

戒は、不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒の五戒からなり、世俗的生活に励みつつも、仏教徒として守るべき生活態度とされる。なお一般仏教徒にとっての五戒にたいして、出家の場合は不邪淫戒が不淫

戒となり、さらに他の五規律が追加されて、十戒となるが、出家と比べて在家の人数は圧倒的に多く、また出家といえども在家の中から誕生することを考え合わせれば、一般仏教徒（在家）の五戒が戒の基礎を築いていることは間違いない。

五戒は倫理的徳目として、生き物を殺さない、人のものを盗み取らない、妻（または夫）以外のものと情交しない、うそを言わない、酒を飲まないと、「すべからず」の禁止的方向で考えるのが常識的解釈であった。

いっぽう五戒を原語パーリ語で当たってみると、各項目に「遠離すること」（veramaṇī）という自制的意味の単語が用いられているところから、「すべからず」の意味ではなく、「究極的にまで、しないように深く配慮する」との語義的解釈に、戒の真意を見いだそうとする傾向が学者には多い。しかし卓上の学者の議論はさておいて、五戒に関する常識的解釈と語義的解釈とには、大きな違いはないとわたくしは思う。五十歩百歩である。両者とも生活環境を狭隘化する方向で五戒を考えているからである。

ところで、人間の日常生活行動の禁止とか抑止傾向の強い五戒は、篤信の仏教徒であればあるほど、遵守しがたいのではなかろうか。「動物も植物も等しく生命体」としてとらえる、論理的思考にたけたインド人が、鳥獣や魚の肉は食してはならないが、野菜や果物は許されるなどと、不殺生戒に関して軽薄な結論を引き出していたはずはない。不殺生戒の語義的・常識的解釈に執着すれば、仏教徒は自己の存在を否定した時にのみ、この戒の遵守が全うされる。こうした五戒観は、明らかに庶民の日常生活から遊離しているといわざるを得ない。これは、他の四戒についても言えるであろう。

五戒は仏教徒の生活態度の基礎をなすものであるが、それが彼らの生活意欲を萎縮させたり、生活環境を狭隘化するものであってはならないと思う。五戒の語義的・常識的解釈は「縮み思考」であって、それに違和感と恐

怖感を覚えるのは、一人わたくしだけではないであろう。

五戒の本質は、人間として最高の精神的・身体的コンディションを創造するのに役立つもの、人間的向上の中核たるものでなければならない。わたくしは、象徴の概念を導入した五戒の「開いた見方」を説明して、五戒にまつわる誤解を払拭したいと思う。

象徴

象徴とは、ことばで表現しきれない価値あるもの・尊いものをなにかに託して、深い内的意味を指し示すことである。宗教では象徴の活用が著しい。十字架は神の愛を象徴し、お守りは超自然的力を象徴しているが、仏教でも象徴が古代から盛んに用いられたことはよく知られている。例えば、仏伝を語るレリーフ（彫刻した平石板）上の菩提樹や仏足跡はシャカの存在を示し、仏像の印契（いんけい）（手指の作相）はその仏像の内心の動きを象徴したものである。

わたくしは、五戒は定型文を媒体にして、禁止的条文以上に価値高い宗教的信条を表現しようとしたものである、と考える。五戒を語義で解釈せずに、象徴の論理を導入して、言外の真理言わば積極的意味を見いだすべきであるように思う。こうした考え方の正当性は、五戒を記した経典『ダンミカ経』によって裏付けられる。

『ダンミカ経』では、サーヴァッティ［舎衛城］のジェッター林苑において、ブッダが五百人の善男善女をまえに五戒の説法を条文ごとに述べている―生き物を害してならぬ、与えられないものを取ってはならぬ、他人の妻を犯してはならぬ、虚妄を語るのをさけよ、飲酒をしてはならぬ、と（中村　元「ブッダのことば」岩波文庫）。ところで、説法の内容が語義以上に出ないとすれば、説法は聴聞者の生活からキョリが大きい失礼な発言と言わざるを得ない。説法に参集する大衆は、少なくとも、高い倫理的生活を求めかつ維持する善き人々である。その人達に「殺生するな、

盗みをするな」という発言は不適切である。また説法の聴聞者に熟年以上の人が多いのは、古今東西、変わらないと思うが、不邪淫戒の内容が語義以上に出ないものとするならば、下世話で低劣な説法と言われても致し方ない。ここに五戒の象徴的解釈の必要性が察知されるのである。

五戒の象徴的内容

五戒の象徴的内容いわゆる「開いた見方」は、わたくしがマンダレーの僧院に起居していたおり、ノートに書きとっておいたものであるが、記して大方のご批判を受けたいと思う。

不殺生戒 人を殺めたり、生き物の命を奪ったり、傷つけたりしない事は、人として、最も厳粛に受けとめるべき事柄であるが、語義に捕らわれてはならない。「限りない慈悲心をもって、命あるものに接しなければならない」というのが真意であろう。従って食べ残しをしたり、スポーツとして狩猟をするのは憚(はばか)られる行為とされる。肉類を食べなければ、戒律が守られていると、言えるものではない。なお、ミャンマー（ビルマ）の僧院では、魚をはじめ豚肉、鳥肉も料理として供されるのは決して珍しくない。

不偸盗戒 人のものを強奪したり、それを人に強要しない事は大切なことではあるが、この語義的内容は、大衆に通常関係がない。「少欲知足に徹せよ、貪欲であるな」が真意であり、人なら誰しも犯しやすい、家族・地域社会など集団のエゴによる無意識の悪行をいさめたものである、と考える。

不邪淫戒 語義的に解釈すべきではないことは既に述べた。この定型文に託した象徴的内容は、「家庭生活を充実せよ。円満な夫婦生活を送れ」という意味であろう。母親に生後間もなく死に別れたシャカは、夫婦の和を中心にした家庭の大切さをことのほか感じていたに違いない。

不妄語戒 ウソを言ってはならないという戒は、そのまま受け入れてもよさそうに思

えるが、やはりわたくしは象徴的意味を汲みとるべきであると思う。学校に遅刻させたくない母親が、五分・十分進んだ時間を子供に言って起こすとき、母親はウソを言っているのであろうか。癌だと診断される患者に、相手の性格を十分飲み込んでいる医者が検査結果をそのまま知らせないで、別の表現をしたとき、その医者はウソを言っているのであろうか。私は、決してそうとは思わない。母親も医者も確かに事実は言っていないが、彼らは真実を言っているのである。真実とは、人間愛というオブラートに包まれた事実である。不妄語の真意は、「人には事実ではなく、真実を語れ」と諭しているものと考える。人には、心の温もりのある言葉が大切である。

不飲酒戒 物が発酵する過程で芳香を発するのは、高温多湿の東南アジアでは、日常茶飯事である。そして程度の差こそあれ、どの地域でも、人は発酵し酒化しつつあるものを食べて生活していると言ってよい。

発酵した物は、果物でも穀物でも、その時間的延長線上には腐敗がある。この戒は、「酒を飲むな」という独善的倫理徳目ではなくて、「健康に留意して生活せよ」との真意を汲みとることができる。

五戒の内容は、一般仏教徒が生活する場で考えるとき、象徴の理論を導入して、戒の内容をネガティブではなく、ポジティブに解釈することの適切さをミャンマーでポンジー（出家）の生活をしてしみじみ味わった。これまで「諸々の悪を作さざれ」との禁止的傾向の戒律感のみ、日本では強調され過ぎてきた。ポジティブに「開いた見方」で五戒を考えることは、日本の仏教徒の生き方としても、大切なことであると思う。

仏教の実践論は「七仏通誡の偈」に要約されている。（高崎直道『仏教入門』）

諸々の悪を作さざれ（諸悪莫作）
諸々の善を進んで行え（衆善奉行）
おのおのの心を浄めよ（自浄其意）
これが諸仏の教誡である（是諸仏教）

橋の端で考える

きりぶち輝

隅田川上り

今、東京・浜松町の日の出桟橋にいます。

これから浅草行きの水上バスに乗ろうと思うのです。この水上バスは、『隅田川にかかる十二の橋をたどりながら、江戸の情緒と東京の「いま」をぞんぶんにお楽しみいただけるコース』というキャッチフレーズです。そのPRに乗せられ、隅田川上りおよそ四十分の船旅?を楽しもうというのです。

いよいよ出港?です。水上バスが隅田リバーを上り始めました。勝鬨橋、佃大橋を過ぎました。中央大橋の下をくぐり、やがて永代橋です。

江戸時代の永代橋は、日本橋川より北に位置していたそうで、この永代橋は大正十二年の関東大震災後の復興橋梁として、帝都（東京）を代表する隅田川の入口に架設された橋。そして、『帝都の門』にふさわしく雄大さを意図したデザインと言われています。つまり上流側の清洲橋の優雅な女性美に対して、永代橋は筋肉隆々とした男性的なスチール、アーチ橋である……と、伊東孝氏が『東京の橋』という本の中で述べています。

なるほど。永代橋の中央は弓型のアーチ橋で、両側は鋼桁橋になっている堂々たるものだと感心しているうちに、隅田川大橋をくぐって清洲橋が見えてきました。中央が下に垂れ二本の柱で支えられた鋼鉄製の吊り橋です。男性的な永代橋に対し、清洲橋のなんと女性的なことか……。この橋を愛する人は多いということです。

これらの橋を次々にくぐりぬけていくと、その美しさに思わず振り返ってしまいました。

橋……。もちろん、川や谷などにかけわたして、通り道とするものにはちがいありませんが、美しい橋にしたことは言うまでもありません。

橋の美観は、遠くから見て全体として美しい橋。比較的近くに寄って、いろいろな角度

から橋全体を見て調和のとれたプロポーション。さらに実際に橋を利用する人が、部材、高欄、手すり、ガードレールなどを見て、違和感をもたないなどなど、設計段階から論議されるそうです。

そんなことを考えているうちに両国橋。この橋も曰く因縁がありそうです。

いろいろある橋

（それにしても、橋は〈かける〉という。なぜ、〈造る〉といわないのだろう？）

首をかしげました。架橋という言葉があります。〈橋をかけること。また、その橋〉と広辞苑にありますから、橋は〈かける〉というのは間違いではありません。

では、〈掛ける・懸ける・架ける〉は？……

上田篤著「橋と日本人」（岩波新書）によると、英語で〈橋をかける〉というばあいにふつう使われる動詞のビルドは、『家を構築する』などというように、構造的にもっと頑丈なもの。つまり、日本で橋をカケルとは谷や川の両端に物をひっかけるような簡単なことを意味し、仮橋というのが日本の橋の第一の性格である……というのです。

では、なぜ日本に石橋というものが発達しなかったのだろうか。いいかえると、なぜ日本はカリバシなのだろうか……上田篤氏は「橋と日本人」の中で、その理由をおもしろく語っていますが、それは省略。

少ししつこくなりますが、上田氏はこの本では、『かけはし・うきはし・つりばし・はねばし・そりばし・やかたはし（屋形橋）』などに分類して述べています。

そうそう。ロバート・ジェームズ・ウォラー著「マディソン郡の橋」はアメリカでも日本でもベストセラーになり、映画でも多くの女性が紅涙をしぼったといいます。〈一緒にいたのはただの四日、橋を撮る写真家とふと知り合った村の人妻の、信じられないような愛を描いて感動を呼ぶ〝永遠の傑作〟〉とうたい

文句にありますが、このタイトルになった橋は、長四角の屋根付きの橋です。アイオワの片田舎などには、この種の橋がいくつもあるようで、ときには恋人たちの待ち合わせの場所に使われたりもしているようだが、いったいなぜ、どんな目的でこんな橋がつくられたのだろう。屋根や壁は橋の構造上の強度を増すためだとも聞くが、それにしてもなんだか不思議な気がしてならない……と、この本の訳者があとがきに書いています。この屋根のある橋が屋形橋なのです。

おしゃべりをしているうちに、いつのまにか両国橋をすぎてしまいました。それどころか、終着の吾妻橋、浅草に到着です。

「またのお越しを心よりお待ちしております。」

のアナウンスに送られて水上バスを降りました。そして、隅田川の川風に吹かれながら吾妻橋の上に立ってみました。

ダンプが通ります。大型バスが走ります。そのたびに橋が揺れるように感じます。

（橋は遠くから見たほうがいいな。SLにしても、乗るよりも野原を走る雄姿を見るほうがいい。それと同じかも……。）

そんなことを考えながら、隅田公園から吾妻橋を眺める位置に立ちました。

そのとき、ふと、おかしなことが頭をかすめました。

三途の川に橋があるかな？

（三途の川には橋がかかっているのだろうか？）

人間は死ぬと、四十九日間を三途の川で過ごすとか。そして、生前の善業、悪行をチェックされて三つのどの川を渡るかを決められるそうです。

この三つの川の流れは、緩やかな流れ、急な流れ、船でも困難な激流に分かれ、自分の因果応報によって決まります。首尾よく渡り

切れたとしても、彼岸には奪衣婆と奪衣翁がいて死者の身ぐるみをはぎとってしまうといわれています。

この死んだ人の行き先を決める間の中間機関…三途の川に橋があるのかしら？

もし橋があったとしたら、彼岸と此岸が自由に往来できます。古代の日本人にとって現世と他界は厚い壁で遮断されてはいなかった。障子かふすま程度の仕切りはあるが、それは開閉が可能であり、死者は正月や盆、春秋の彼岸などに親しい生者の家をおとずれて祝福し、もてなしを受けて、また、死者の国に帰っていった。その風習は仏教の体裁をとりながらも、今まで根強くつづけられている……と、民族学者の言。

この死者は、三途の川にかかる橋を行き来したのかしら？　ピカッとひらめきました。

（あっ。橋はいらないんだ！　西方極楽浄土から阿弥陀如来がわざわざお迎えにきてくださるのだ。）

阿弥陀如来来迎図。阿弥陀さまの画像を思い浮かべたのです。雲に乗ってやってこられる阿弥陀さまには橋なんか必要ないんだ。どうしても橋にこだわるならば、火の河と水の河にはさまれた二、三十センチ幅の白い平らな道、これを橋に見立ててはいかがでしょう。『二河白道』という教えがあったような気がしますが……。

どうも凡人には自信がありません。幸い、浅草から地下鉄の都営浅草線で五反田に行けます。

（そうだ。わが菩提寺に行こう。わからないことがあったらいつでもいらっしゃいと言ってくださっている……。）

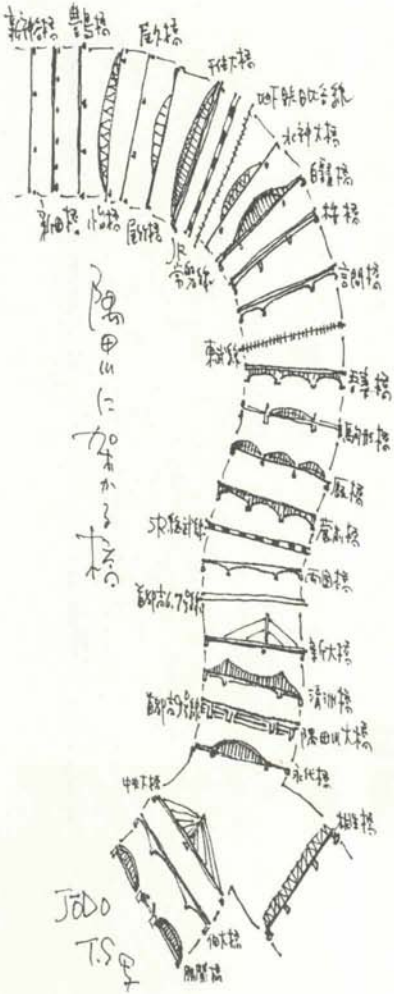
品川区上大崎にある隆崇院の竹中信哉住職のお顔を思い浮かべて、地下鉄に乗りこみました。さっきは水の上、今度は地下です。この地上には金杉橋、少し離れて一の橋、二の橋、三の橋、古川橋、四の橋、赤羽橋となつかしい名が残っています。

地下鉄高輪台下車。ここから隆崇院まで徒歩十五分です。乾燥した晴天つづきの坂道をゆっくり登ります。春は名のみと言いますが、なんとなく春の光を感じます。

「またまた難問、珍問ですか。困っちゃうな……。」

と、黒ぶちの眼鏡をずり上げて、信哉住職に笑われてしまうかも…。でも、檀那寺が好き。ついつい甘えてしまいます。だから、毎月の念仏会が楽しくて、待ち遠しくて……。

もうすぐ涅槃会。



（あっ。俗世間の人間と阿弥陀如来との間をつないでくださる橋は、もしかしたら、僧侶かもしれない。）

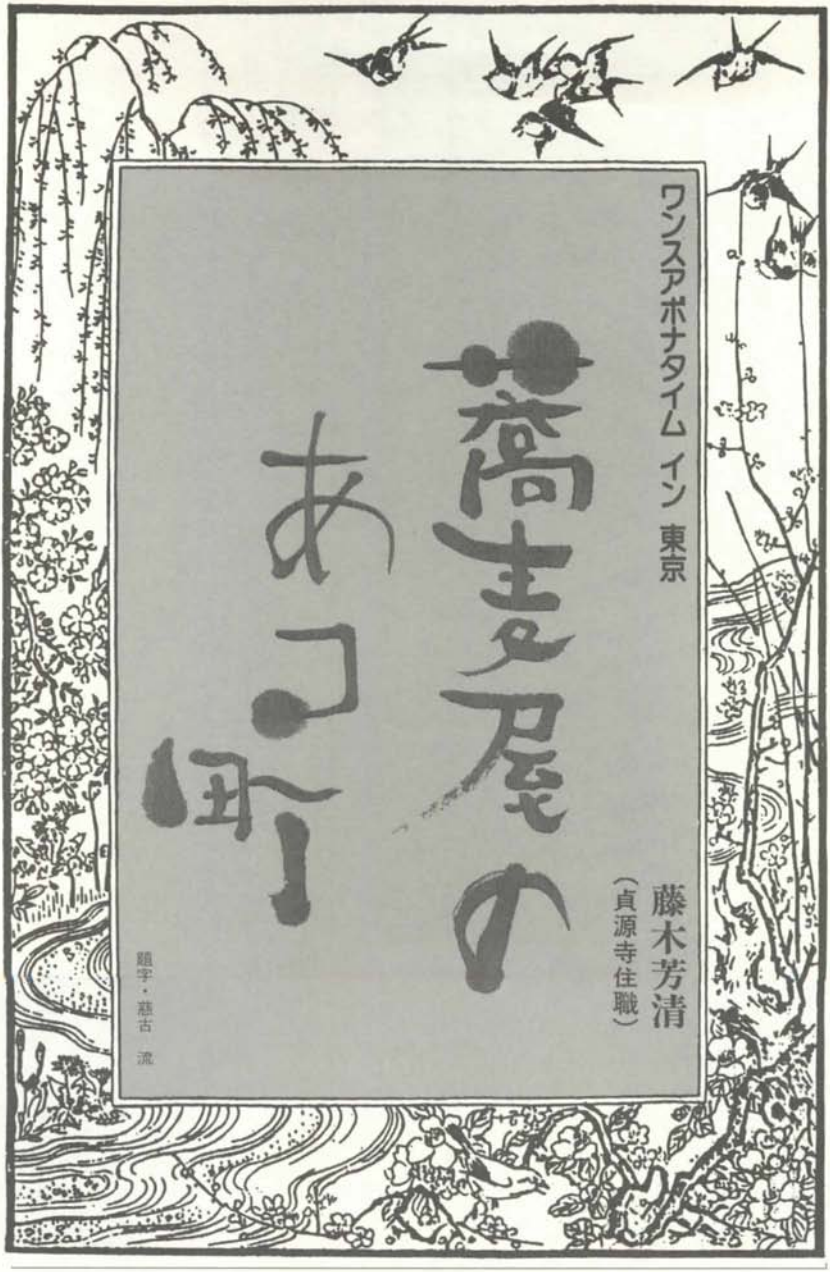
漱石ではありませんが、山道ならぬ坂道を登りながら、こう考えました。しかし、僧侶を橋に例えたら失礼かしら……。

（このことも教えていただこう。）

足に力を入れて一歩、一歩。まもなくわが隆崇院です。

隆崇院の名物の大桜の芽も目覚めていることでしょう。

（きりぶち　てる・童話作家）


ワンスアポナタイム イン 東京
蕎麦屋の
あるじ
藤木芳清
（貞源寺住職）
題字・慈古 流

私は子供の頃、蕎麦、特にもり蕎麦はあまり好きではなかった。

蕎麦屋へ連れて行って貰うことがあっても、大概ラーメンか、せいぜいきつね蕎麦をたのんでいたように思う。

蕎麦業者の組合が、

「これからはかけ蕎麦に焼麩を加えることにしました。これでラーメンと同等の栄養価を得られます」

と、いうようなことを発表した新聞記事を呼んだ記憶がある。

あるいは、うっすらと緑色がかった蕎麦独特の色を際だたせるために、当時脚光を浴びていた栄養食品、クロレラを打ち込んで着色することを思いついたという蕎麦屋の紹介記事もあったように思う。

私が子供の頃は、何よりも栄養を第一義として食事を考えていたような時代だった。

毎年選ばれていた健康優良児の体格などは、今なら、おそらく肥満児といわれるのではないだろうか。

しかし、そんな時代の風潮とは関わり無く、蕎麦の持つ味わい、あの、滋味といわれるような味わいが、子供の舌に馴染まなかったのだと思う。

それが何時の間にか、出先で昼食とか夕食までの腹塞ぎなどには、まず蕎麦屋を思い浮かべるようになった。

私の蕎麦好きは、時には自分で打つほどの蕎麦好きだった祖父ゆずりのようだ。

祖父は、私が小学校三年の時に亡くなっているのであまりはっきりしたことは憶えていない。

途切れ途切れに憶えていることも、実際の記憶なのか、それとも、祖母や古いお檀家さんから聞かされたことを、自分の記憶のように思っているのかはっきりとした自覚は無い。

祖父は、夕食の時、錫の銚子を薬罐の縁に懸け、熱燗で晩酌をするのが習慣だった。

私は、祖父の膝の上で、晩酌の肴を一通り

貰ってから自分の食事をしていたという。
三つ子の魂百までという諺があるが、私の食べ物の好みは、祖父の膝の上で基礎が出来上がったのだろうと思う。
「お前はだんだんお爺ちゃんに似てくるんだねぇ。お爺ちゃんは本当に蕎麦好きだったんだよ」
そういいながら、祖母がよくこんな話をしてくれた。

お盆のお棚経でお檀家さんの家を廻っているとき、昼間に伺った家で、
「ご住職はお蕎麦が好きだから」
そういってもり蕎麦をとってくれた。
祖父は寺に帰ってから来て、
「彼奴はまったく蕎麦好きの気持ちのわからない奴だ。
もり蕎麦の一枚くらいなら、むしろ出してくれない方がいい。まったく寝た子を起こすような真似をしおって」

そういったという。

祖母は、いつも、さもおかしそうに話してくれたのだが、

「本当の蕎麦好きというのはそういうものかも知れない」

私はそう受け止めていた。

自分から蕎麦屋に行くようになったのは、二十代の半頃からだったろうか。

その頃は、神田、池之端、並木の、俗にいう「藪の御三家」や、室町の［砂場］、今や蕎麦好きの間では伝説的存在の片倉康雄氏の息子さんの［一茶庵］など。

要するに、有名店ばかりへ行っていた。

常に三人前を一日六回は食べていた程の当時の私の食欲では、そういう店は、腹は一杯になっても懐が寂しくなってしまうので、たまに行くという程度だった。

それが、三十を越えた頃に、私の蕎麦好きの虫をたたき起こすようなことが起こった。

私の住んでいる町の近くに、今や伝説的な店として全国の蕎麦好きに知られる［翁］が開店したのだ。

店主の高橋邦弘さんは、いわゆる脱サラで、当時片倉康雄氏が東京で開いていた蕎麦教室に通い、その後宇都宮の［一茶庵］で三年間修業した後、豊島区南長崎に店を出した。

私が［翁］の名前を耳にしたのは、開店後三年ほど経った頃だが、もう既に一部の蕎麦好きからは東京一ともいわれていて、私が住んでいる中野からは、それ程遠くないこともあって、興味本意で足を運んでみた。

「蕎麦というのは、こんなにも旨いものだったのか」

それが初めて［翁］の蕎麦を食べたときの素直な感想だった。

一日三百人分、売切仕舞という方針で営業していたこともあって、遅くとも三時頃には閉店してしまうので、昼時の混雑が終わった

頃を見計らって、週に二、三回の割で通うようになった。

家内の両親の里である山形へ旅行したとき、はじめから計画していたわけではないのだが、無性に蕎麦が食べたいという気になって、三泊四日の間、昼食とおやつの度にあちらこちらの蕎麦屋に立ち寄るという旅行となった。

合計で六、七軒ほど入ったろうか、特に印象に残ったのは、山形県村山市大久保の［あらきそば］、会津若松市内の［桐屋］、南会津桧枝岐村の民宿［白木屋］の蕎麦料理やそこのお婆さんの打った裁ち蕎麦。

この旅行で、蕎麦というものは、これ程に単純な料理でありながら、これ程までに味に違いがあるものなのかと、改めて思い知らされたように思う。

［翁］と出会って、私の中に巣くっていた蕎麦好きの虫が目を覚ましてしまったようだ。

その後、東京の有名無名の蕎麦屋を始め、旅行に行く度にその土地の蕎麦を食べるのが楽しみのひとつとなった。

何処の地方のどんな蕎麦も、皆それぞれに旨いとは思う。だが、やはり、「江戸前の」とか「二八の」などといわれる東京の蕎麦が、私には一番好みに合う。

江戸の頃から東京は、全国から人が集まってくるところ。文化も習慣も違う人々がつくり上げた共通の文化が「江戸前」といわれるものだと思う。

料理も、あらゆる地方の人に受け入れられるようなものとして工夫され、つくり上げられてきたのだろう。

しかし、その東京の蕎麦も一様ではない。

蕎麦はもともと趣味のものだから、すべてを吟味したものを、ほんの一寸味わえばそれでいいのだという食べ方もあれば、落語の「蕎麦の羽織」の台詞ではないけれど、

「どうですあの食べっぷり。ツゥーとお蕎麦の方からロン中へ飛び込んでいきます」

「ああいうのがほんとのそばっ食いてんでし

ような」

などという食べ方もある。

当然、それぞれに蕎麦の作りも違ってくる。

私としては、やはり蕎麦などは、小気味よくツゥーッといきたいもので、ひと箸毎に吟味するような食べ方は、どうも性に合わない。

バーコード状態と表現した友人がいたが、蒸篭の簾に張りついたような蕎麦を出す店が在る。そういう蕎麦を「もり蕎麦」とは、不当表示ではないのか。

もっとも近頃では、そのことに気が付いたのか、「もり」とはいわずに「せいろ」という店も出てきた。

そういう店の中には、

「もりを下さい」

「せいろですね」

などといいながら、笊に盛ってきたりするような嫌味な店まで在る。

量の少ないことでは自らが、

「他の店の半分くらいでしょうか」

と、認めている、浅草の［並木藪蕎麦］では、

「量を多く盛ると下のほうの蕎麦が水でのびてしまいますので」

と、その理由を説明しているが、その言葉通り、水捌けのいいように、裏返しにした笊に盛ってくる。

何枚注文しても、客の食べる速さに合わせて、一枚を食べ終わる頃には次の蕎麦が出てくる。

こういう筋の通った店なら、量が少ないということが、それ程気になるものではない。

私の住まいに近いところに、休みともなれば交通整理のアルバイトが必要なほどに込み合うような店が在った。いや、今でも在るのだが、既にかつて程の人気はない。

その店に、家から近いこともあって、一度だけ行ったことがある。

天せいろを一枚たのんだものの、それ以上蕎麦を追加する気にもなれず、食べ終わると急いで［翁］へ行ってせいろ二枚を食べ直した。

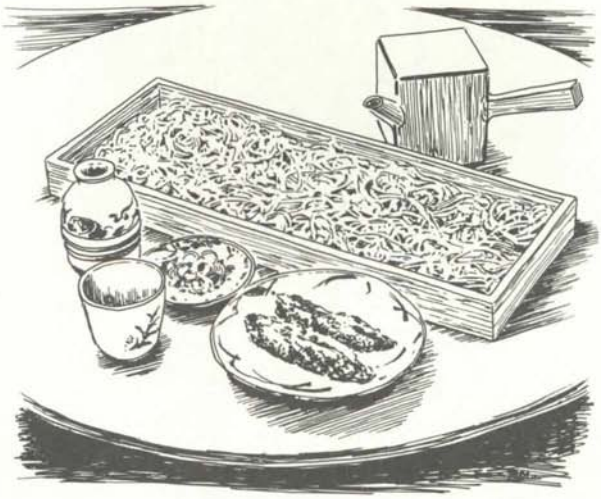
何のことはない、二軒に跨って天せいろを食べたようなものだ。

何故その店で満足するまで蕎麦を食べる気になれなかったかというと、蕎麦をはじめ、薬味の大根、葱、山葵、天麩羅の海老からその揚げ方まで、机の上にびっしりと能書きを書いた紙が置かれている。蕎麦の分量も極端に少ない。

そうした諸々のことが、高い料金を客に納得させるための演出のように感じてしまったのだ。

目隠しをして耳を塞いで食べるわけではないのだから、そういう余計なものが、嫌でも目に入るようになっていると、煩わしくて蕎麦を味わうどころではなくなってしまう。

どんなに材料を吟味しようが、どんなに料理に手を掛けようが、結果として旨ければそれでいいのだし、旨い蕎麦を提供するためにそうしなければならないと思っているのなら、その店としては当然のことをしているだけで、



何も客に自慢するようなことではない。
そういう店が、
「昔から蕎麦は食事がわりにするようなものではありませんでした」
などといいながら、食事時以外の時間に休憩をとったりする。
かつて新宿で、夫婦と母親の三人だけで営っていた、[みつい]という名の小さな蕎麦屋が在った。
主人は、昼の混雑が終わった頃を見計らって、狭い厨房の中で蕎麦を打っていた。
その蕎麦を打つ速さ、手際の良さが実に見事で、わざわざそれを見たさに空いている頃見計らって立ち寄ることがあった程だ。

江戸っ子は、将軍様のお膝下で、三度三度白い米の飯が食えることが自慢だった。だから、間違っても救荒食料である蕎麦を食事にはしなかった。
江戸っ子を自認する程の者は、他人が目をむくほど蕎麦を食った後でも、
「蕎麦なぞは食事がわりに食うもんじゃぁねぇ」
という見栄を張り通すために、意地でも米の飯を食ったろうと思う。
馬鹿馬鹿しいとは思うが、江戸っ子の意地の張り様というものは、そうであってほしい。
江戸前の蕎麦は、そういう江戸っ子の好みに合わせて完成されたものなのだから、蕎麦屋というものは、どんなに工夫を凝らし、材料を吟味し、旨い蕎麦を提供することに日々精進していても、
「たかが蕎麦じゃぁありませんか」
店全体にそういう気分を漂わせていてほしい。

私が下町と呼ばれる方へ足が向くようになったのと、蕎麦屋へ頻繁に出入りし始めた頃が、殆ど一致する。
余計なことだが、ここで私のいう下町とは、せいぜい西は本郷通りを境に、北は三ノ輪、

南は日本橋、東は清澄通り、大幅に譲っても三ツ目通りの辺りまでのこと。

旨い蕎麦が食べたくて下町へ行くのか、下町に行くからその界隈の蕎麦屋へ立ち寄ることが多くなったのか、それは鶏と卵の関係のようなもので、自分でもよくわからない。

下町には、その店の、客の懐具合に見合った材料で、できる限り旨い蕎麦を提供しようとしている店が多い。

そういう店は、構えや店内の様子、食器や調度品まで、すべてが、いかにも蕎麦屋らしく思えるものだ。

古川柳に、

「ふるさとへ廻る六部の気の弱り」

というのがある。

旨い蕎麦が食べられる店を探しながらあちらこちらと出歩いているうちに、それが、次第に下町になり、その下町に、しっかりと根を下ろした店以外には、あまり行かなくなってきた。

そういう店の多くは、幼い頃に見知った店の雰囲気、いや、かつて、祖父やその年代の人達が通った蕎麦屋の雰囲気を持っている。

私が蕎麦屋へいくということは、つまるところ、蕎麦を食べに行くだけではなく、幸田露伴、山本周五郎、子母澤寛、池波正太郎、そういう人達の本で知った江戸の流れを、下町の蕎麦屋に見ているのだろう。

エドワード・サイデンステッカーは、『立ち上がる東京』という本を、

「都庁はついに、江戸の外へ出てゆく」

という言葉で始めている。

薩長新政府以来今に至るまで、延々と破壊され続けてきた東京に、辛うじて残っているものは、最早気分だけなのかも知れない。

下町には、その気分を、微かにではあるけれども、味あわせてくれる蕎麦屋が在る。

（以下次号）

COLUMN

若和尚の チョットいいはなし 其十一

二月三日は節分会。「鬼はそと！　福はうち！」のかけ声とともに豆を撒く「追儺式（ついなしき）」の行事が今年もたくさんのお寺や神社で催されることでしょう。この豆撒きは中国の風習にならったもので、日本では既に室町時代から行われていたということです。最近は人気力士や歌手を招いて華やかに行われているようですが、やっぱり昔もそうだったんでしょうか？　歌舞伎役者や旅芸人を招いていたりなんかして…。ほとんど興行ですね、そうなると。

それは兎も角として、様々な災難を鬼とみなし、これに豆をぶつけて退治し、厄払いをしようというのが豆撒きの目的ですが、皆さんにとっての鬼は何でしょうか。ご主人？　奥さん？

実は案外自坊の御前様だったりして…。それも否定はしませんが、もっとそばにいませんか？　ちょっとの間、鏡を見つめてみましょう。もしかしたら、あなた自身が、自分の心が鬼になっていることはありませんか。心当たりが無いとは決して言えないはずです。

そう、私たちは誰でも、自分の中の鬼と同居しているのです。ただ気付かないだけなんです。自分が世帯主ならまだしも、中には立場が逆転してしまっている人もいるようで…。普段はうまい具合に隠れていても（隠しているつもりでも）、何かにつけて顔を出すんですよね。そんな時に自分を見失ったり、余計な失敗をしたり、人に嫌な思いをさせてしまったり、あるいは自分が嫌な思いをしたり…ということになるんです。どちらかと言えば、こっちの鬼を退治することのほうが先決でしょうね。

それにはどうしたら？　そう、私たちも一人ひとりが豆撒きをするのです。力士も歌手も招く必要はありません。自分の心に豆を撒けばいいんです。お念仏という豆を。これならいくら撒いてもなくなることはありません。しかもパワーは強靭無比です。自分の力ではなかなか払うことの出来ない厄介な鬼も、阿弥陀様にはかなわないはずです。毎日毎日を自分の節分会にして鬼退治に励まなくては……ネ。

（正）

C O L U M N

お許し下さい！

誤植始末書に代えて

刷り上がったばかりの雑誌を手にとるとき、編集者は説明のつかない感動をおぼえます。毎月時間のやり繰りをしながらいろいろと苦労して出来上がったものなので、まるで難産の末に生まれた子供を見るような思いがするのです。胸に抱きしめたい気持ちになります（実際には気恥ずかしくて出来ませんが）

けれども、その至福の瞬間から一気に奈落の底へ落とされた状態になることがあります。

「浄土」一月号。表紙にjanuaryとあるのはjanuaryの誤りです。誠に恥ずかしい間違いで、気づいたときには死にたくなるような気分に陥りました。その時既に発送は終わり回収不可能。発送前に発見したとしても、刷り直し、製本のやり直しは時間的にも予算的にも難しく、またそのこと自体資源の国家的損失であるとも指摘されてしまうであろう狂おしい恐怖の一瞬です。

まず第一に、読者、関係者各位に深く深くお詫び致します。

それとともに、いやそれ以上に、この雑誌そのものに対して謝らなければならない。そんな気持ちで一杯です。「浄土」にいま何よりも「浄土」に…本当に申し訳ないことをしました。

※　※　※

校正をしていない訳ではないのです。チェック機能は何段階にも働いているのです。それなのに何故。

新しい意匠の表紙の校正が上がってきたとき、色、構図、紙質全てについて、皆心配をしていた。まずそれがよく吟味された、あのときです。プロの編集者が三名（そのうち一人は毎月英文のテキストも作っている男です）立ち会っていました。

その全員が一様に見落としたのです。嗚呼、甘えの構造とでもいうべきか。中学一年レベルのスペル誤記！　全員が信頼？しあってしまった。まさか、と思った。「校正用の赤ペンを手にした瞬間から人格は鬼に変わらなければならない」と普段、若い連中に偉そうに教えていた自分が恥ずかしい。辛い、苦しい、どうかお許しを。どうか。

（自分を呪いながら暗澹たる正月を悶々と過ごしたTより）

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

冬新年　誌上俳壇

冬の空西方浄土の如来像
すがすがし初日を仰ぐ生命かな

児玉良男（静岡）

双六の上り大きな日章旗
母の読む百人一首京訛り

吉田ゆきゑ（東京）

動かざる風見の鶏と春の月
初蝶とわかれて道の遠くなり
枯蔓の支柱の脚にくずほるる
末の子がすり鉢支ふとろろ汁

内堀綾子（東京）

水仙はよこむく花ようつむくも
春雪の山をかくすも思ひ止む

児玉仁良（埼玉）

誌上詩壇

みめぐみのありがたさに
手を合す時その手には
花の蕾の如　希望の宿る
心よりの合掌は
この人の世にまことの情と
英知の花をさずからしむる
幸あれと光さやかに
和み空　　合掌

匿名希望（埼玉）

京都一千年の歴史に
育まれた巧みの技
京仏壇・佛具は当店に!!

〒六一五　京都市右京区
西京極南衣手町七四
(株)島津法衣佛具店
☎〇七五―三一四―七七六八
FAX〇七五―三一五―三七五三

緊急投稿　匿名編集子

笑える校正、笑えない校正

著者はもとより、編集者や校正者の多くは呪文のごとくに、「校正畏る可し」を唱える。この呪文は「後生畏る可し」のもじりであるが、本家の方の呟きには、例えば清原がイチローを、谷川王将が羽生六冠王の出現を密かに嘆いたものとしても、当事者以外には世代の交替を告げるがごとくに、切なくも希望を孕んだものとして聞えてくる。

対して、前者は飽くまでも俯き加減、悔悟を友として甚だ元気がない。長嘆息さえ聞えてくる。普通、失敗は反省を伴って経験となり、人をしてより人たらしめるよう導いてくれるのだが、「校正畏る可し」と嘆息しても一向に効き目なく、同じような過ちをくり返してしまうのは何故なのか。酒の上のしくじりと似ていなくもない。などと転じてしまっては話が一向にすすまないから、その「畏るに足る事例」を引いて考えてみよう。

事例1正「一杯一杯復一杯」
　　誤「一杯一杯腹一杯」
事例2正「大正天皇」
　　誤「大正天脳」

事例1は文句なしに笑える。笑えるのだが文章として成り立ってしまうところがオソロシイ。

事例2はどうか。こちらは文句なしにオソロシサが先に立つ。であるがどこか可笑しい。この可笑しさは或る年齢層によってそうとして受け止められる。

さて、1と2ではどちらが始末に悪いか較べるのはむずかしい。1は前後の文で誤りが判るとしても一応成り立ってしまうところがあり、2は明らかに誤りであると気づかされるから1の方が始末が悪い、といわれれば肯かされるが、一字のミスの重さからいえば2に軍配が上がる。仄聞であるが、2の過誤を冒した雑誌は即日回収となったそうで、この一字を見逃してしまった人たちに同情を禁じえない。

原因はいわゆる変換ミスなのだろうが、ワープロの普及は時としてこのようなオソロシサを秘めているのだ。しかし、ぼくらが日本語という複雑怪奇な言語と付きあっていく限り、校正はますます畏るべきものとなってくるはずだ。従って校正に十全を尽した後は読者の寛容なる精神に委ねる以外途はない。

公開講座のお知らせ

念佛に生きる私共の日頃の諸疑問、信念、意見等、情報を交換し、会員相互の信交を深めてまいりたいと存じます。

つきましては、何かとご多忙のこととは存じますが、僧俗の別なく情熱をお持ちの方は、お誘い合わせの上、多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。

記

日　時　平成8年3月9日（土）午後2時より

会　場　新宿太宗寺（地下鉄丸の内線　新宿御苑前）
東京都新宿区新宿2－9－2
電話03（3356）7731

内　容　別時念佛会
講演「生前葬儀と人前結婚式」
大室了晧先生（東京教区長　月刊『浄土』編集顧問）
情報交換

参加費　無料

服　装　特定しませんが、念珠、輪袈裟をお持ちの方はご持参ください。

◎なお、定員に限りがございますのでお早めに事務局まで葉書かFAXでお申し込み下さい。

法然上人鑽仰会事務局
港区芝公園4－7－4
電　話03-3578-6947
ＦＡＸ03-3578-7036

編集後記

豆食うは心の中への豆まきか　岱潤

東京の街では豆まきの声はほとんど聞かれなくなってしまった。豆まきは有名社寺で芸能人や相撲取りがするものと思い込んでいる人も少なくない。しかし、スーパーなどでの豆の売れゆきはいいようである。撒くことはしなくとも食べる風習は残っているようだ。

そこでこんな句を詠んでみた。元来鬼は、心に巣くっていると考えたほうが仏教的なような気がする。鬼に牛の角と虎のふんどしを履かせたのは、長安の都に匈奴の盗賊がやって来ることから、北東つまり丑寅の方角から来る鬼を描いた姿だ。そういった現実的な存在を考える必要のない我々は、我々自身の心の中の煩悩を鬼と理解したほうが解りやすい。ではなぜ豆を撒くのかについては、諸説紛々しているようだ。だいたいは「豆」は「魔滅」に通じるからということ、また「魔目」に通じ、鬼の目をつぶすからだという語呂合わせのようだ。そこで今年は「鬼は外」と念じながら豆を食べてみようと思う。歳の数で終わりそうもないのが気がかりだが。

コラム欄で、編集子が述べているように、誤字脱字というもの、本作りを何年していてもなくならない、誠に頭の痛いもので、お詫びと訂正の繰り返しには、我ながら情けなくなる、なぜ校正の時気がつかなかったのだろうと自問自答するが、後の祭りである。ご迷惑をおかけした当会の理事初め、関係の諸先生にとにもかくにもお詫びを申し上げる。

月刊誌といえども、毎回何人かの方からは、「この号は特別だ」と思えるような、そんな本作りを心がけたい今日このごろである。（長）

編集チーフ　長谷川岱潤
編集スタッフ　斎藤晃道
村田洋一
太田正孝
石上俊教
編集協力　オフィス頼伽代表佐山哲郎
編集顧問　大室了晧

浄土　六十三巻二月号　頒価六百円　年間費六千円
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷――平成八年一月二十五日
発行――平成八年二月一日
編集人――宮林昭彦
発行人――牧田諦亮
印刷所――株式会社平文社
写真植字――株式会社シーティーイー
〒一〇五 東京都港区芝公園四―七―四明照会館内
発行所　法然上人鑽仰会
電話〇三(三五七八)六九四七
FAX〇三(三五七八)七〇三六

LIFE TOGETHER

NISSAN

人間のやさしさをクルマに。

使えるよなあ、こいつ。

こんどのパルサーは、たのしい新実用主義。

いろんな機能性に、ヨロコビがあるのが新しいのだ。それが、こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり遊ぶ、しっかり仕事する、しっかり生活する、Mr.しっかりのこれからを、気持ちよくサポートします。

これ安心
■運転席SRSエアバッグシステム全車標準装備。

NISSAN with AIRBAG

走る走る
- 快走、マルチリンクビームサスペンション(リヤ)。
- うれしい低燃費＝1500X1(5速フロアシフト)18.7km/ℓ、1500REZZOプライマリー(5速フロアシフト)19.6km/ℓ(10・15モード燃費/運輸省審査値)

らくちん
- 上質感のある、しなやかな乗りごこち。
- ゆったり室内スペース。

＋ツイてる
- 新型エアコン。
- トランク、ポケット等、収納性しゅうぶん。

パルサー4ドアセダン 1500CJ-1(5速フロアシフト) **131.3万円**

パルサー4ドアセダン 1500X1(5速フロアシフト) **148.4万円**

上記価格にはメーカーオプション(スポーツパッケージ 12.5万円)が含まれておりません。

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(除く、北海道・沖縄)

Mr.しっかり 新パルサー誕生

[Mr.しっかり] 日常フダン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。③〜状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO：パルサー4ドアセダン1500X1。ボディカラーはブルーイッシュシルバーM(ECKG1)。スポーツパッケージはメーカーオプション。●希望小売価格はスペアタイヤ・標準工具付。寒冷地仕様は1.7万円高となります。●保険料、税金(消費税含む)、登録等に伴う諸費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が独自に決めておりますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車お客様相談室 全国共通フリーダイヤル 0120-315-232 ●お求めは、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産チェリー各販売会社へ。

SAPPORO

その手にあなたの冬物語。

冬は物語をつくる名人です。ほかの季節にはない
銀世界や星空や暖炉を用意して、
人と人の新しい出会いをつづります。
サッポロ冬物語、ことしも出ました。あなただけの
物語を演出する、冬だけの生ビールです。

［冬季限定醸造］

SAPPORO

冬物語

あきかんはリサイクルへ。ビールは、20歳になってから。

サッポロビール株式会社 ご協力のお願い：自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。